

令和6年度 第5回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和6年11月21日（木）13時30分～15時40分
- 2 場 所 岐阜市庁舎 6階 6－1大会議室
- 3 出席者 柴橋市長、伊藤委員、加藤委員、岡本委員、益子委員
- 4 招聘者 東京大学 公共政策大学院 教授 鈴木 寛 氏
- 5 傍聴者 一般3名、報道関係者1名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議

「未来を拓く力を育むこれからの学校」

7 議 事

(13時30分開会)

(1) 市長あいさつ

(2) 協議

① 事務局説明

(資料1「未来を拓く力を育むこれからの学校」)

② 招聘者講演(鈴木 氏)

(資料2「未来を拓く力を育むこれからの学校」)

③ 教育長意見

(資料3「未来を拓く力を育むこれからの学校」に対する意見)

④ 意見交換

○加藤 委員

ユニセフの2020年の調査で、日本の子どもたちの精神的な幸福度は下から2番目、身体的な幸福度は上位で学力は5位、社会的なスキルは下から2番目で、まさに相反した調査結果で、これはコロナ前もコロナ後も同じような調査結果ということがわかっている。諸外国は結構学力が落ちて困っていると聞くと、日本の子どもたちの学力が落ちてなかったのは、やはり塾の力だと正直思う。学校で勉強をきちんと教えてあげれば、塾に行かなくてすむので、子どもも家にいられるしお金もかからないのに、塾に行っているから親子の時間がないし、塾に行っているから親が仕事しなければならない。そういう意味での教育システムに日本がなっているのは非常に大きな問題で、空きビルがあると塾に変わるほど塾産業が今、巨大化している。だからそういう日本のあり方と、ものすごく関連しているので、すぐに何か変わっていくわけではないけれど、そういうことが子どもたちや家族をむしばんでいることをよくわかっておかないといけないと思う。

まさに好きとか楽しいとか好奇心というのは自分の体からわきでるもので、そういう人間の感情はほぼ3歳までにほとんど出来上がっている。アウトプットはできないので言語では楽しいとか羨ましいとかは表現できないが、3歳までにすでにある感情なので、3歳までの感情がいかに醸成されているかで、その子の人生がある意味決まると思った。やはり3歳までの教育が大事で、豊かな知覚や身体感覚から入ってくるものをどれだけ伸ばしてあげることができるかが土台だと非常に今日の話を聞いて強く思った。

今の教育のありかたは、幹が育っていないのに、枝と葉をつけて芽と花を咲かせようとしている感覚。まさにAIが代わりに色々な仕事をしてくれる時代がそこまで迫っているから、未来に必要な能力を早く身に付けさせる教育をしていきたいのは分かるが、土台ができていないのに、脳だけが分かっていて、感覚は伴っていないということが起きるだろう。生きる力をしっかり身に付ける教育をしていくことはやはり大事だと強く思った。

2015年と2050年の必要な能力がすごく変化してきて、2015年に必要な能力が今の学校でまだ重視されている現実があるのに、2050年に必要な能力が身に付くのが問題だと思う。学校の中で個別最適で自主性が大事と言いながら、学校のルールに合う子でないと生き抜けない現状があり、その差をどう埋めていくかを本当に真剣に考えないと、子どもたちは混乱し、混乱する子は落ちこぼれて学校に来なくなる。先生の言うことを聞ける子だけが学校に残る。その辺りをどう分析したらよいのか私の中ではもう少し現実の声を聞きたいと思った。

諸外国に比べて日本の子どもたちは圧倒的に睡眠時間が短い。イギリスは中学生や高校生でも9時間ぐらい寝るというデータがある。日本の子どもたちは塾から帰ってきてご飯を食べて寝るのが12時で朝7時には起きる。そんな子どもたちがどれだけ本当に生きる力を身に付けられるのか疑問に思う。結局大人が幸せでないと子どもも幸せにはなれないので、いかに大人が幸せになり、いかに大人が勉強し続けるかだと思う。

今後の学校の在り方は、やはり先生がコーチになるのが一番と思っている。子どもの認知特性を把握して、その子に合った教育の教材をピックアップして一緒に学習システムを考えていくことを先生が行うのが一番だと思うし、先生がコーチとして人生の先輩として伴走者になる。そういう先生の在り方になっていくとよいと思う。

○岡本 委員

私は会社を経営しており、入社してくる子たちをどう教えていくか、私自身、教育委員会で教育に携わって教え方が変わってきていろいろと学ばせていただいている。

勉強をあまりしてこなかった子たちが比較的多く入社してくる会社だが、入社して必要に迫られ、これができないと仕事にならないということになると、逃げずに一生懸命やってくれる。そうして身に付いて、それができて褒められると、次にまた向かっていこうという繰り返しになっている。今の子どもたちに勉強にしても何にしても、そういう頑張ったことでの成功体験や、周りから褒められるという環境がどれだけあるのだろうか。何となく目標だけが上がっていて、頑張ったらさらに次々にハードルを上げられ、子どもたちは際限なくやらされている感じになっていないか。これは勉強にしても部活にしても色々なことに起きていないかと感じている。

また、同調圧力というか、個性を大事にと言いながら、周りと一緒にできないと、その子が低く評価されてしまう。本来自分の好きなことを言いたいのに、周りと一緒にできないのに勝手なことを言うなとなる。個性をよしとする学校や社会の雰囲気は少し弱いのではないかと思う。仕事で海外に行くと、仕事の服装や仕方も非常に自由で、その人の人柄や考え方がよく表れている。日本の場合、服装も顔も同じようでないといけないというのが強いと思う。私自身、学校は必ずしも勉強のためだけではなく、学ぶことに対しての姿勢をまず育む場だと思っているし、同時に集団社会の縮図として、将来社会に出て活躍するための予行練習の場だとも思っている。個人として自分自身の独創性や個性、突破力を育みつつ、同時に友達と一緒に協働や強調することで、一人ではできない問題を解決していく経験をする場だとも思うし、集団としてのモラルや倫理も同時に学んでいくと思う。

学校は仮にリモートでも、やはり集団と個々と学ぶ時間があるべきだと思うし、学習集団は状況に応じて変化していくというのは本当にそうだと思う。学校にいても一人で勉強や試作することも大事だし、大人数で合唱など力を合わせて行う体験もやはり必要だと思う。

最終的にウェルビーイングの視点から、日本の社会の特異性も含めて、どうしたら自分の個性や好きなものを子どもたち自身が自由に選び、発信して進めていけるようになるのか、学校の中でも作っていかないといけないし、家庭や社会の関わるべきところだと感じた。私自身も学ぶ姿、それが幸せな人生だという姿を子どもも含めて、周りに示していければと感じたところです。

○伊藤 委員

休憩室で社員とテレビを見ていたら、日本の子どもたちの精神的な幸福度が大変低いというニュースをやっていた。日頃から感じていることは、お金を稼ぐということが幸せではなく、自己表現や自己実現できることに幸せを感じる人が増えていて、学校も自己表現、自己実現あるいは前段階の子どもたちなら、自己選択、自己決定ができる機会を増やさないといけないと思った。岐阜県内の高校で、制服を廃止する高校がでてきて、受験時の倍率がたかくなりました。自己選択や自己実現ができる学校だろうと憧れを持って入学を希望する子どもたちが増えたのだと思う。意思決定に子どもたちが参加していける学校が未来の学校ではないかと思った。

その中で、家庭からのサポートが日本は最低評価で、私も3人の子どもを育てながら仕事をしている母親ですが、学校には意思決定の参加を子どもにさせてと言いながら、家庭で参加させていないことを今反省しています。ただ意思決定には、義務や責任がついてまわり、嫌だからやらない、塾に行かない等、子どもたちに自己決定させることがよいのかどうか、ただの甘やかしになってしまわないかという線引きが大変難しいところで子育てをしている現状です。だから子どものことを一番知っている先生や親が、甘やかしではなく自己実現をさせるためにいかに子どもをコーチングできるかというトレーニングをもっとしなければいけないし、親たちも学んでいかなければいけないと思いました。自己実現の価値はそれぞれ違うし、それを学校で行っていくことが個別最適化の理想の姿ではあるが大変な課題が多い。今回鈴木先生にお答えをたくさんいただいたので、ぜひ岐阜市の教育に生かしたいと思いますが、今の公教育の予算や人員でそれを考えると限界があり、理想はあるけど実際難しい現場だと思う。

私は小さな塾も経営していますが、もっと民間との連携を深めて、民間の教育サービスと学校教育が融合できればと思っている。文部科学省の人に民間との連携について尋ねた記事があり、大歓迎ですと答えていた。民間教育が学校教育の中に入っていくことを認めてもらえるのであれば、民間は公教育のように無償というのは難しいので、どう進めていけばよいのかと思う。先月鎌倉市が経済的に厳しい家庭に、民間教育を利用する際の教育クーポンを配布しているというニュースを見て、こういうことも行政としてやることができればと思った。

一対一というのが一番よく、それが生徒と生徒でも、先生と先生でもあると言われましたが、私は一対一の一人が人でなくてもよいと思う。子どもたちの探究心が強く、より高度なことを求めることや先生がついていきませんというときもあると思うし、認知的な特性で動画や書物または現場で学びたい等いろいろある。人以外の教材を学校が求めた場合、予算的に手に入らないことも多いと思う。そのときに民間からの寄付を募ってもよいのではないかなと思う。夏に女性校長会の大会で講演料を辞退したら、それはできないと言われました。それなら寄付させてくださいといったらお金は困るので物品なら、とのことでした。会長が特別支援学校の校長先生で、高等部の子たちに自転車に乗れるようにさせたいということで、大人用の三輪自転車を寄付した。学校全体ではなく、一部の子どもたちだけしか使わないものだななかなか学校では買えない。そんな時、数万円の単位の寄付なら、民間企業もお役にたちたいと思っているところもたくさんあるので、何か紹介できれば手を挙げていただける企業も多いと思う。子どもたちがもっと学びたいと思ったときに、いろいろ引き出しを出してあげられるような仕組みを民間と一緒に作っていければと願っています。

○益子 委員

今日のお話伺って、3点ほど、感想を含め、希望も交えて話したい。

まず一つは、保護者との関係や学校生活が生徒のウェルビーイングに影響を与えているという話と、家族からのサポートが日本は非常に低いという話について。1990年ぐらい、日本の学校が算数数学の学力が世界一と言われている頃に、公衆の科学の理解、いわゆる Public Understanding of Science の分野で、OECD加盟国の成人に対する、科学的リテラシーの調査結果が発表になった。日本は環境問題に興味がある20歳以上の大人の割合が、OECDの国々の中で最低で、科学的な記事や

新聞などの読解力も OECD 加盟国の中で最低という結果だった。今日の話で現状は変わっていないという気がした。岐阜市の草潤中学校で、信頼できる大人が周りにいることが重要という実践の成果が出てきていますが、科学的リテラシーを勉強している大人や、感心をもって本を読んでいる大人が周りにいるかどうか。そういう大人の存在が、やはり小学生や中学生に大きい影響を与えるのではないと思う。実際、私も現職の先生を大学院生として迎えた経験もたくさんあり、修士論文を家で書いていると、近くに子どもが寄ってきて、ずっと本を読んでいる。家庭の中で保護者が一生懸命勉強していると、何をやっているかと自然とそういう行動をとるようになると、笑って話してくれたのですが、今の話と類似性があるかもしれないと思っている。大人からのサポートを受けるかどうかの雰囲気作りもあると思うが、周りの大人の存在が学習することにとっても大切で、とりわけ未来の学校で大切なものが何かと言ったときに、信頼できる大人プラス、学校を卒業してからも学び続けるのは素晴らしいと感じるような大人の存在が必要ではないかと思う。親自身が勉強しないのに、子どもに勉強しろと言うばかりで勉強するようになる時代ではない。生徒のウェルビーイングは、その家庭や家族、それから保護者と学校生活の中で取り巻く大人に対する子どもの反応がデータとして出てきているように思い、学びも全くその通りかもしれないと感じたのがまず第一点目である。

二つ目は、自立学習を自ら実行する自信がない生徒の割合が、非常に高いというのに驚いた。TIMSS の学力調査を受けている国の、授業のビデオを撮って分析する国際比較研究が行われたときに、日本の先生は自分の授業にものすごく自信がないというアンケート結果が出て、他の国に比べて分析に値しないくらい低いという話を聞いたことがある。アメリカの人からすると不思議なことであるが、日本の学校の先生と付き合いがある私たちには思い当たる節がある。完璧な授業はないので、日々の授業をもっと良くするにはどうしたらよいかと考えていると、今日の授業に対する自信はと聞かれるとやはり自信はないと答えるだろう。同様に、自立学習については全くできないわけではないけど、日本の子どもたちは自己評価が低く、そういうカルチャーの影響は少なからずあるのではないだろうか。ただ単に自立学習に対する自信をつけるのではなく、生徒の自己評価能力をつけた上で自信をつけるというワンクッション置いた教育をしていかないと。ただ単に自信を向上させるとなると、これは危険なところもあるのではないかと思ったのが二つ目。

三つ目は、やはり公正な個別最適な学びと協働的な学びに必要な手立ては、平等を超えて手立てを打っていくべきだと確かにその通りだと思った。学習者の認知特性も把握しながら対応していくのはとても大切だが、従来の集団としての学習指導において教師の教育技術が育まれてきた面もある。率直に気になるのは、クラスサイズで、ベテランの先生ならクラスサイズが縮まれば、公正な個別最適な学びはかなりの割合で実現できるが、クラスサイズが変わらず、学習の形態だけが変わると、教師のストレスがますます向上する心配がある。この点で教育長のコメントにもある教職員定数の改善、これは非常に難しい問題だとわかっているが、ここを見据えながら理想の公正な個別最適な学び、協働的な学びを具体的に考える必要があると強く感じた。

○鈴木 氏

塾に行ける子と行けない子の学力の差がついてしまって、塾に行けないお子さんをどのようにサポートしていくかということがやはり重要だと思っている。一方で民の力を使う、コミュニティス

クールで地域のいろいろな人材にいろいろな形で入ってもらうことはありうると思うし、コミュニティスクールのボランティアも、単にマンパワーとしての位置づけもさることながら、地域ボランティアや保護者ではない学生ボランティアが入る等、子どもを中心の関係性が非常に豊潤になると思う。手伝ってくれたらありがたいが、そばにいてくれるだけ、友達になってくれるだけでも十分に意味があり、いろいろなじめがある中、それが最悪化しないことが大事だと思う。少なくとも本当に理解して寄り添ってくれる存在がいると思えるか思えないかが非常に重要で、多様なスクールコミュニティを作っていくことが大切になると思う。そういう意味で提案しているのは、学校図書館に社会人も来て、仕事をしてよいというスペースを作って、ITのSEの人がいたら、「3時間目の授業で実際に来てお話してもらえませんか」とその時間だけ工面してもらう等あってよいと思う。安全性の問題もあるが、いろいろな大人が学校に適切にいて、ITCも教えてくれたり、探究の相談にのってくれたり、そういう出会いと繋がりをうまくつなげられるような仕掛けや仕組みができるとういと思う。

身体性とか、純粋経験という体験は非常に重要だと思っている。どんなに裕福な家庭でも、家庭だけの体験には限界があり、学校がやるべき役割として、仲間同士でいろいろな自然体験や社会体験を作っておくことが、学校に残された非常に重要なやり続けるべきことだと思う。

日本は工業社会で、不良品の率をどれだけ減らすかで勝負してきた。大学入試センター試験はマークシートでどれだけミスを減らすかで、こういう能力をひたすら磨いた人が大学入試の成功者になってくる。だからこそ大学入試試験が重要で、センター試験はミスを減らすというのが対策になる。だけど荒削りでよいから、何か一つ前進があったことを評価できるのは、まさに探究のよいところで、それを国立大学入試に使われている。その影響で私立中学も先取りして入試が相当変わってきている。

私の見える世界はばらつきがものすごくあり、教員間、保護者間あるいは学校間のばらつきがどのように埋められていくのか、また、褒められることも大事で、現場に行けば自分がやっていることが本当に役立っているかどうか肌でわかる。そういう意味で実地の学びは、自分の能力と貢献がリアルタイムでフィードバックされることが非常に重要で、探究や研究はとても大事である。日本の大学生は学ばないという伝説があり、これは半分正しく半分まちがっている。例えば、看護学生は来週看護実習に行くとなればすごく勉強するし、教育学部の学生も来週生徒の前で教えるとなれば、ものすごく勉強する。そういう意味で、実地の学びと繋がれば、日本の学生も学び始める。

私はN高等学校にも少し携わっていて、耳にピアスを開けていたり髪を染めたりしていても全く関係なく、昼間は自由に探究活動をしている。ピアスをしているけど、量子力学にはまっている子もいれば言語学にはまっている子もいる。そういう高校生が今はもう2万9000人いる。半分以上の子は中学校の不登校経験者。そういう子たちによるコミュニティが実はもう出来上がりつつあり、気がついていないのは大人だけ、彼らはものすごくクリエイティブな子もいれば、引き続き大変な子もいる。

この4月に岡田武史監督が学園長のFC今治高等学校が開校して、非常に面白く、ある意味、文部科学省の学習指導要領を最も先取りした新設校で、教員と言わずコーチと呼んでいる。既存の学校に入ったので、1年生はFC今治高校里山校という新しいスタイルで、2年3年はそのままが残っていて、そろそろ2学期が終わろうとしているが、一度も罵声をきいたことがない。一方で既存の

2、3年生は、朝から夕方まで先生は怒鳴ってばかりで、同じ地域でも、怒鳴らなくても成立するということが少しずつリアリティとして出来上がってきている。そういうのを見ていると本当に過渡期で、要は学校長次第、学校の組織のトップがどういうコミュニティや組織を作るかでかわる。日本の子どもたちはポテンシャルがあるので、本当に今大事なのは、我々大人の学び直しというか認識を変えていくことだと思う。

今何が起きているかという、公立の校長会と文部科学省の若手とのギャップがものすごくあり、最もかわらないのは保護者です。公立の校長にもいろいろな人がいて、ご自身はかなり自由で本当は学校も変えていきたいと思っているのに、保護者のプレッシャーの中で変えられない。この循環をどう断ち切るかだと思うので、岐阜からぜひ始めてほしいと思う。ただ、コミュニティスクールで本当に熟議して、いろいろな人たちで学び合うということはすごく重要で、そういう土壌は岐阜にはあると思うので大変期待している。

○加藤 委員

今の話は未来に向かってすごく世の中を作っていけるようなきらきらした子たちの話で、今成績にしても何にしても二極化していて、分断社会に日本もなっている。本当にどうにもならない自尊心の欠片もない子たちがすごくいる。ひきこもりの子たちを日々見ていると、夢も希望もない子たちがいる。ひきこもって幸せならよいと思うが、本当に幸せではない子たちがたくさんいる。その根源は、居場所がない、駄目な人間だとすりこまれてきていることです。

N高等学校の子たちも最初は夢も希望もない子たちで、居場所ができ、別にこんな僕でも大丈夫と思えたわけで、そう思えるような転機がいつ来るかだと思う。今、不登校は問題行動ではないと言いながら、やはり子どもにとっての社会的な死という傷つき体験を迎えている子たちに、どのようなケアをしていくかはすごく重要です。外来で見ていると将来、生活保護等が必要な人がすごく増えていくのではとすごい危機感を持っている。今の教育を変えていかないと本当に日本が立ち行かなくなる。これだけ少子化で若い子が減っているのに、働けない子どもたちが増えてくる可能性があり、キラキラしてどんどん伸びていく子たちもいるけれど、取り残されていく子どもたちをどのように見ていくかはすごく重要で、何とか生きていけるという安心感が持てる社会にしないと駄目だと思っている。

家庭の力が弱くなっているのは、親が悪いわけではないとすごく言いたい。親御さんは一生懸命頑張っているけれど、家庭がそこまでサポートできないというのは、社会のサポートがないから家庭がサポートできないということ。必ず家庭が悪い、親が悪いという議論になるので、なぜ家庭がサポートできないのか、やはり考えていく必要があると思う。

○柴橋 市長

我が国のウェルビーイングの問題について、私はとにかく親子の愛着形成の機会を作ってほしいと思い、私自身が絵本の読み聞かせを様々な場所で行っている。絵本の読み聞かせは5分あればできるので、そういう機会を作ってほしいと思っている。私立幼稚園に訪問して実践したことに

ついて、保護者から「この前うちの子のところへ来てくれたのですね」と声をかけていただいている。家庭の中で話題にしてもらえたのならば、それをきっかけに、家庭でもまた本を読んで欲しいなと思っている。

教育大綱に「目指す家庭・地域の姿」と「家庭」という言葉をあえて入れたのも、教育における家庭・地域の役割と責任に対する意識の向上という表現があり、この教育大綱の議論をするときに、家庭という言葉は入れて、子どもにとって学校、家庭、地域、みんな当事者だということを明確にするためこの表現にした。特に家庭の力がいろいろな背景の中で弱くなっていると問題意識を改めて思っているところである。

昨日、社会が暗記教科でなくなったことを我が家で実感した。子どもが自主勉強していて、「お父さんこれどうしてだろう」と質問をしてきた。学校でも単に事実を覚えるだけでなく、なぜと考えることを投げかけているのかと感じたところで、これはまさに主体的で、自分でまず考えてみるとよいとヒントだけをあげた。

また、フレキシブルな学校のハードは非常に大事だという話について、特にこれからの学校の先生は、まさにアントレプレナーシップが求められるし、マネジメント力がとても求められるということも感じるところである。

大学の教育学部で教育学や学校の授業の教え方、学級経営は学ぶが、一人一人の子どもたちに多様な学びを組み合わせ、個別最適な学びをどのように作っていくか、そこをを学生の時にいろいろ経験して学校現場に立つことが求められるのではないかと感じた。今後、未来の学校と言えば、ハードの部分は教育委員会や行政だが、子どもたちに寄り添う先生方の求められる力が大きく変わってくると思うので、ぜひ教育学部の中で変革をしていただけるとありがたいと思う。私も子どもを育てる保護者でもあり、子どもは案外先生を見ているので、子どもからいろいろと聞く。先生方もきちんと学んでもらえると、学校の現場である程度の自信を持って、自分の教育哲学をしながら、子どもたちに対応できるのではと感じている。

最後に、高校時代が非常に大事だということについて、母校の後輩に話をする機会があり、感想文を書いてもらったことがある。私が敗者復活の話をしたからか、授業に苦しんでいるとか、成績が芳しくないと書かれていた。高校は大学受験があり、まだ1年生だけど、打ちひしがれている15歳、16歳がたくさんいることを私の経験からも感じた。我々、小中一貫の義務教育学校を手がけているが、世の中には中高一貫も存在する。中高一貫の意義、高等学校3年間の教育に対して小中学校の中で求められるものについて、話をいただきたい。

○鈴木 氏

中学受験が向いている子もいれば向いていない子もいるし、高校受験が向いている子もいれば、高校受験を避ける方がいい子もいる。要するに発達段階が子どもによって違うので、年齢が12歳と15歳と非常に微妙で、それがちょっと早まれば中学受験で、遅くなれば高校受験やその準備期間にぶつかる。どれがよいではなく、多様な選択肢があることが大事。だから義務教育学校から高校3年に行くパターンも充実しているし、中高一貫校で6年があう子もいる。兄弟や双子でも、向

き不向きは違ってくる。私立も公立も含めて、いろいろなタイプの子どもたちに多様な選択肢を通学圏内で用意できることが大事であると思う。

N 高等学校はネットの高校なのに通学コースが人気で、1 日、3 日、5 日コースとあり、個別最適化されている。また、誰と学ぶかということも非常に重要で、学力が均質な人と学ぶことがよいこともあるし、あえて違った才能を持った人たち、あるいは違う知識や能力を持った人たちが集まるということもすごく重要。それこそ福島県立ふたば未来学園は、学力が厳しい子から、東北大学を目指す子までいて、両者にとって、学力差を超えて多様な人と学ぶことがものすごく意味があるので、そういう機会をもう少し増やしたほうがよいと思っている。

(1 5 時 4 0 分閉会)